

## [担当教員]

北後明彦（教授）中江研（准教授）後藤沙羅（助手）多賀謙蔵（教授）

[Teaching Assistant]

旭智哉（A69）長田遙哉（A69）高坂啓太（A69）

## ■課題概要

猛威を振るう新型コロナ・ウィルス=COVID-19（コヴィッド－ナインティーン）は世界中のひとびとを家に閉じ込め続けている。これまで当たり前であった通勤はウィルスを媒介する危険な行為として忌避され、テレワーク、在宅勤務が叫ばれている。朝夕の移動の煩わしさから逃れられるものの、生活の場に就業時間／空間が入り込み、同居家族の生活はかき乱され、ひとり暮らしではリアルには誰とも会わずに日々が過ぎていく。そうした日々によって、インターネットのビデオ会議のコミュニケーションでも充分な業務、対面ではなくても済んでしまう仕事が露わになった。しかし、その一方で、やはり実際に同じ空間にいないとできないこと、いて欲しいということも強く再認識させられる。

そして、この COVID-19 の嵐を抜けた先、POST-COVID-19においては、いつ、どこで、どのように、そして“誰といっしょに”に、“誰とつながって”、仕事をするのか、はたらく場所そのものの存在の意味、在り様の再検討が始まるだろう。POST-COVID-19 の世代にとっての新しいワーク・スペースを想像力豊かに構想し、かつ実際に建設され、使われるものとしてのアリティを失うことなく、建築物として設計することが本演習の課題である。

上記の『いつ、どこで、どのように、“誰といっしょに” “誰とつながって”はたらくのか』という問い合わせに対し、『（社外・地域社会との）つながりを生む空間』をあわせもつ空間、環境の提案を行う。

## ■オフィス・ビルの概要：どのようなはたらき方をする建物か

- ・業種・業態の設定：自由に、かつ具体的に、想定すること。ただし、倉庫等の“もの”的めでなく、“ひと”的めの空間づくりを主眼に

## おくこと。

一就業者数の想定：當時50～60人程度が執務するものとする。男女比、業務部門の構成などは業種・業態から適切な想定をすること。

一業種・業態を活かす建物のあり方を自分の設定にあわせて考える。

## ■敷地

- ・阪急六甲駅周辺の二か所（B,C）の敷地から一つの敷地を各自選ぶ。
- ・敷地面積はいずれも約600m<sup>2</sup>（20×30m）程度である。

・敷地内の高低差は現状の地形を前提とする。

・周辺環境などの諸条件は各自の調査に基づいて想定してよい。

・各敷地での建蔽率指定は60%、容積率指定は200%である。

## ■建築概要

・構造規模：鉄筋コンクリート造3～4階建て、ラーメン構造を原則とする。

・延べ面積：1,000～1,200m<sup>2</sup>

・管理用出入口やバックヤードに連絡しやすい場所に自社や配送業者などが一次的に使用する駐車スペース2台分を確保すること。

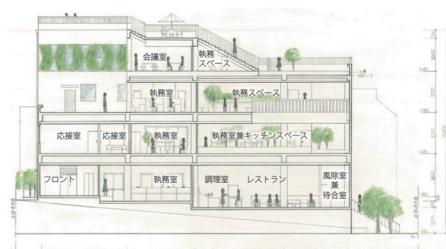
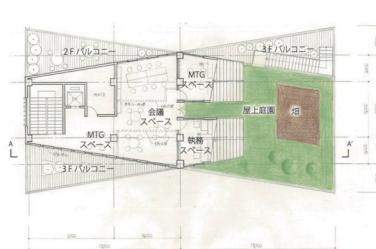
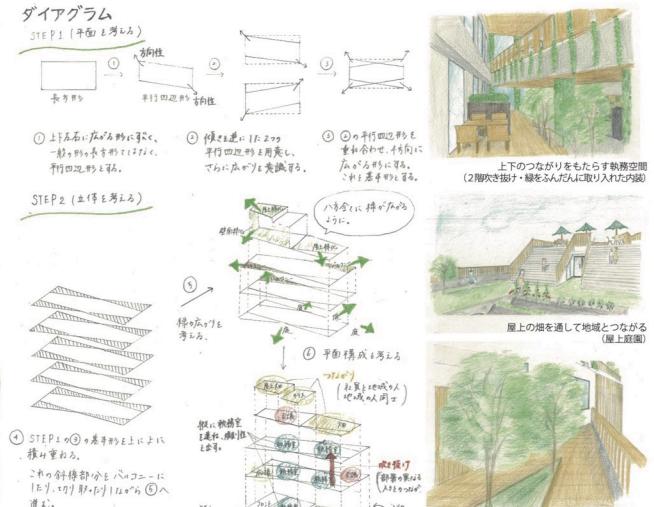
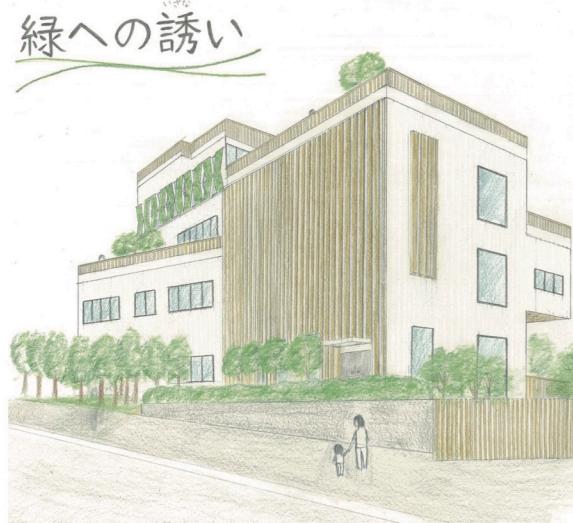


課題敷地

## 緑への誘い

山口沙礼

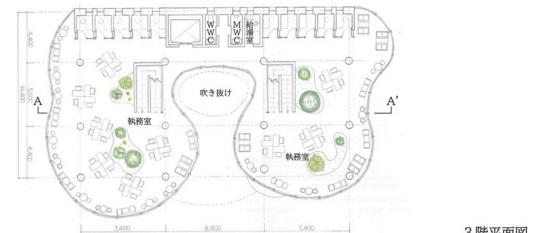
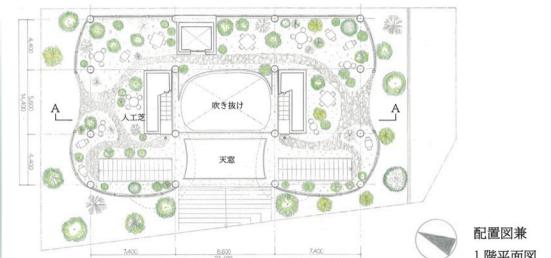
緑が少ない住宅街に、テラスや屋上空間を設け、緑をふんだんに取り入れた農業ITの事務所を建てる。人々が緑に誘われ、立ち寄りたくなる、憩いの場であり、また、この事務所を通して街中へ緑を誘う。自由に入れる屋上の畠や規格外野菜を食せるレストランを設け農業への興味を誘う。



## 深く鮮しい

千馬生吹

アトリエ系設計事務所の設計。路地に開けた吹抜けの大樹は人の目を引き、大樹を見上げると4階まで続く吹抜けから光や風を感じる。吹抜け周りに階段を設け壁面はガラス張りにするなどどこにいても緑を感じられる。深く緑に染まり解き放たれた空間は、働く人々へ鮮しい建築の発想を促す。



## 緑 つながる

丁子紘亘

コロナウィルスを踏まえた、広い庭のような、人々と関わりながらフレキシブルに働けるオフィス。2~4階の庭は立体的につながるテラスとなり、1階の庭は吹抜けの中に設け地域の人々が入りやすくしている。テラスや吹抜けに囲まれた事務室は縦につながる不思議な事務空間となる。

